

1 研究主題

「知的好奇心あふれる授業の創造」

～見方・考え方を生かし、児童が自ら探究する意欲を高める指導法の工夫～

(1)研究主題の設定について

本校では、「自ら考え行動する、心豊かな人間性の育成」を学校の教育目標とし、目指す児童・生徒像として以下の4点を設定し、日々の教育活動に取り組んでいる。

- 考えぬく子……………よく見、よく聞き、よく考え、自分で決め、実行する子
- 前に踏み出す子……自分で計画したことや決めたことを、周りのことも考えて、進んで実行する子
- ねばり強い子……………目標に向かって、最後まであきらめずにやり通す子
- やさしい子……………相手の気持ちを考えて、お互いに協力し合う子

ところが令和2年4月、政府から新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発出され、日常生活や学校生活等、様々な活動が制限されたり、児童全員に配付されたタブレット端末によるオンライン学習が実施されたりと、児童を取り巻く学習環境は大きく変化した。そのような状況の中で、学校教育目標および目指す児童・生徒像を具現化するための手立てや研究についてもコロナ禍の影響を大きく受けることとなったが、感染症対策を施し、学習環境を工夫しながら教育活動を継続してきた。

このような社会情勢を受け、令和3年1月26日中央教育審議会から出された『「令和の日本型教育」の構築を目指して(答申)』によれば、「予測困難な時代であり、新型コロナウイルス感染症により一層先行き不透明となる中、私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われている。また、目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、最適解を生み出すこと」が強く提言されている。つまり、コロナ禍で大きく変化した「これからの学校教育」とは、学校生活全般で児童に「目の前の事象から課題を発見できる力」「主体的に問題を解決できる力」を身に付けさせることであると考える。

これを受け本校では、研究主題「知的好奇心あふれる授業の創造」を設定し、学校教育目標の具現化に向けて目指す児童・生徒像の一つである「考え抜く子」に着目しながら、理科・生活科・生活単元学習を軸として研究を積み重ねていくこととした。

「考え抜く子」とは、よく見、よく聞き、よく考え、自分で決め、実行する子である。理科・生活科・生活単元学習に置き換えれば、社会や自然の事物・現象から、課題を発見し、解決方法を考え、実行する子である。その出発点となる社会や自然の事物・現象から課題を発見するための原動力となるものが、「知的好奇心」である。児童が「やってみたい!」「調べてみたい!」「知りたい!」と強く願うこと、すなわち知的好奇心をもつことで、活動に強い意欲をもち、課題について主体的に考える姿が生まれると考える。つまり、児童が「考え抜く」に至るためには、知的好奇心を引き出すことが必要不可欠である。また、上記の「令和の日本型教育」の主張にもあるように、本校の児童が学校生活における様々な事象に対して、自ら課題を発見し、よりよい解決方法を自分の頭で考え、最適解を自分で決め、対話や協働を通して実行していく力を身に付けるために、今年度は副主題「見方・考え方を生かし、児童が自ら探究する意欲を高める指導法の工夫」を新たに設定し研究を推進していく。

(2)「知的好奇心あふれる授業」について

平成28年の中央教育審議会答申(概要)によれば、理科において「小・中・高等学校教育を通じて、知的好奇心や探究心をもって、自然に親しみ、見通しをもって観察・実験を行い、その結果を整理し考察するなどの探究的な学習の充実を図る」ことが明記されている。

本校でいう「探究する意欲」とは、理科の場合、「児童が主体となって、問題を見だし、解決の方法を考え、実験を行い、結論を出そうする意欲」と定義する。また生活科及び、生活単元学習では、「児童が主体となって、願いや思いをもって、その実現の方法を考え、実行していこうとする意欲」と定義する。したがって、「知的好奇心あふれる授業」とは、「児童が、学習の主体者となり、単元を通して、探究する意欲が連続して高まっている状態の授業」と定義したい。

(3)探究の過程について

探究的な学びの先行実践によれば、成果として、科学者が行っている活動を体験することで科学的リテラシー※₁を高めることができると挙げられている。(2023. 吉金)

一方で課題として、単元の計画が長くなってしまうことや、新たな課題を見いだす場面や意図的な活動の場を指導者が上手く設定することが難しいことが挙げられている。

理科・生活科・生活単元学習の探究の過程を「資質・能力を育むために重視する探究の過程のイメージ(中学校学習指導要領平成29年告示理科解説編より)」を参考に作成した場合、下表1のように大きく3段階になると考える。

(表1)【探究の過程表】

探究の過程	理 科	生活科・生活単元学習
①課題の発見 →	①問題発見・見通し	①見付ける・見通し
②課題の探究 →	②仮説・予想の発想	②願いや思いをもつ
	③解決の方法の発想	③願いや思いを叶える
③課題の解決 → 及び一般化	④考察・振り返り	④振り返る
	⑤次の探究の課題	

* 見通しと振り返りについては、単元全体を通してのみならず毎時間の学習で行う。

このような探究の過程を実現するために、「問題を発見する力」や「仮説・予想の発想の力」、「解決の方法の発想の力」、「考察の力」等の「科学的に問題を解決する※₂力」を、令和5年度から令和7年度までの3年間をかけて児童に身に付けさせていきたい。そのために、研究1年目から研究3年目にかけて、「重点目標」及び「研究仮説」を設定し、主題にせまることができるようになっていく。また、今回の研究を通して、単元の計画の長さや、探究する意欲が生まれるような単元の構成や、意図的な活動の場を工夫することができるようになっていきたい。

※₁ 「科学的リテラシー」とは、「自然界及び人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意思決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力」のことである。

※₂ 「科学的に問題を解決する」とは、自然の事物・現象についての問題を実証性、再現性、客観性等といった条件を重視しながら解決していくことと考える。

《令和5年度：研究1年目》

【理科・生活科・生活単元学習の重点目標】

メタ認知する力を定着させるための「振り返り」

児童が探究の過程の始めとなる「問題を発見する」ためには、自己の学習状況の把握や自己の変容に気付くことが大切である。

毎時間の学習の「振り返り」の際に、自分は、「何が分かっていて、何が分からないのか、単元の始めと終わりを比較し、自然の事物・現象に対してどのようなことが分かったのか」、メタ認知（自分が物事を認知している状態を、客観的に認知している状態）できる力をつけていく必要がある。

メタ認知する中で、「知らないことがあることに気付く」ことを大切にして、「もっと知りたい」、「調べたい」、「確かめたい」という探究の過程につながるようにしていきたい。

また、上記の流れは、学習指導要領の「育成を目指す資質・能力の明確化」の考え方である「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く知識技能の習得）」につながる。

《令和6年度：研究2年目》

【理科の重点目標】

「仮説・予想の発想の力」、「解決の方法の発想の力」に関わる「見通し」

【生活科・生活単元学習の重点目標】

「仮説・予想の発想の力」、「解決の方法の発想の力」に関わる「願いや思い」

児童が自分の考えに根拠をもつことができるようになるためには、既習の内容を理解していることが重要である。例えば、既習をしっかり理解していれば、「～の学習で学んだことをもとにすると、きっと、こうなるだろう。」というような予想や仮説、願いや思いを自分で考えることができる。振り返りと見通しを毎時間の授業や単元の中で意識的に取り入れていくことで、探究の過程の流れが少しずつできてくるのではないかと考える。

上記の内容は、学習指導要領の「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成）」につながる。

また、「振り返り」「見通し」以外にも、問題を解決していく上で、大切なことは、「見方・考え方」である。特に、「考え方」については、児童が思考して解決していくための足場となる。

主な「考え方」として、理科の場合、「比較、関係付け、条件制御、多面的」等の4つの視点があり、生活科、生活単元学習の場合、「自分の生活において思いや願いを実現していく学習過程」のことである。教師側にとっては、単元を構成したり、意図的な活動の場を用意したりする上で重要なポイントになってくる。

《令和7年度：研究3年目》※公開研究会

【理科・生活科・生活単元学習の重点目標】

「振り返り・見通し・思いや願い」を生かし、児童が自ら探究する意欲を高める指導法の実現

研究1年目の重点目標である「振り返り」、研究2年目の重点目標である「見通し」をもって「見方・考え方」を生かし、児童が自ら探究する意欲を高める指導法を確立していきたい。学習指導要領で言えば、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養）」にあてはまっている。

したがって、「理科・生活科・生活単元学習」を通して、児童が学習の主体者となり、見方・考え方を生かし、自ら探究する意欲を高め、知的好奇心あふれる授業を実現することで、令和の日本が求めている人間像に近づくことができるように研究を進めていきたい。

(4)研究計画

	令和5年度	令和6年度	令和7年度
生活科 生活単元学習	【重点目標】 「振り返り」	【重点目標】 「願いや思い」	【重点目標】 児童が自ら探究する意欲を 高める指導法
理 科		【重点目標】 「見通し」	

2 令和5年度 重点目標にせまるための研究仮説について

これまで本校では、「知的好奇心あふれる授業の創造」を研究主題に設定し、長年研究を積み重ねてきた。その中で、児童が見通しをもって学習に取り組むこと、さらに深めたいことや不思議に思ったことを書くことに課題がみられることがわかってきている。そこで、令和5年度は以下の研究仮説を設定し、課題解決に向けて授業実践および検証を行っていく。

【令和5年度 重点目標にせまるための研究仮説】

発達段階に応じた1時間ごとの学習を振り返り、自ら学習状況を把握することで、探究する意欲を高めることができるであろう。

学習過程に「振り返り」と「考察・まとめ」があるが、同じ意味でとらえてしまうことがある。「考察・まとめ」は、「学習対象」が主語であり、「振り返り」は、「学習者」が主語であることから、2つの過程は異なるものであることを共通理解しておきたい。

「振り返り」では、自分は何が分かって、何が分からなかったのか、自分の学び方はどうだったのかという視点を児童、教師共に意識することが大切である。

そこで、令和5年度の重点目標である「振り返り」の共通指導事項として、以下の2点を挙げるとともに、児童の発達段階に応じた「1時間ごとの学習の振り返り」を行う。

(1)毎時間の学習の終末に振り返りをし、自己の学習状況を把握できるようにする。

(2)課題に対する自分の考えが、単元の始めと終わりで、どのように変わったのか変容を見て取れるようにすること(自己変容、概念獲得)

(1)「自己の学習状況を把握する」とは、その時間で自分自身が

- | | | |
|------------|------------|------------|
| ①分かったこと | ②分からなかったこと | ③不思議に思ったこと |
| ④もっと知りたいこと | ⑤確かめてみたいこと | ⑥やりたいこと |

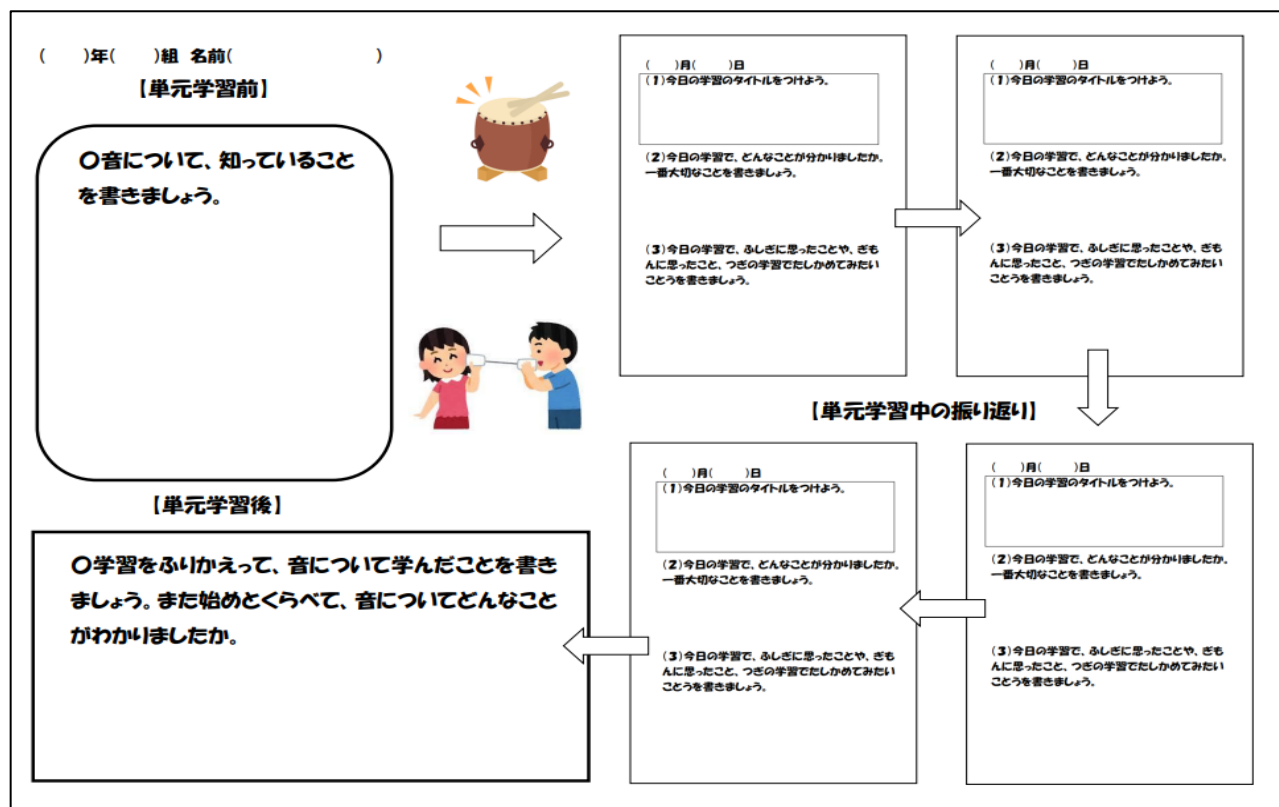
をメタ認知できることである。また、「振り返り」から変容を見て取れるようにする方法については、「記述、発言」、「質問紙」、「記述分類式」、「ICT 機器の活用」等が考えられる。

その中でも令和5年度は、「振り返り」から変容を見て取れるようにする方法として、「③記述分類式」の一つである「OPPA シート」(1枚ポートフォリオ評価)を採用することにした。(堀. 2019)OPPAシートとは、山梨大学堀哲夫名誉教授が開発した一枚ポートフォリオ評価法OPPA (One Page Portfolio Assessment)で用いられる、学習者が一枚の用紙に授業前・中・後の学習履歴を記録し、その全体を学習者自身が自己評価するシートである。

OPPAシートは、①本質的な問い②学習履歴③自己評価で構成されている。教師は、その一枚で学習者の診断的評価、形成的評価、総括的評価を行うことができる。

このOPPAシートを活用することで、児童自身が自ら学習履歴を確認しながら学習を進めることができるとともに、自己評価をすることができ、指導者は課題に対する児童の考えが単元の始めと終わりで、どのように変わったのかその変容を見て取ることができるようになる。

(例)OPPAシートを活用した振り返り(3年 音のふしぎ)



【生活科】

友達との学び合い

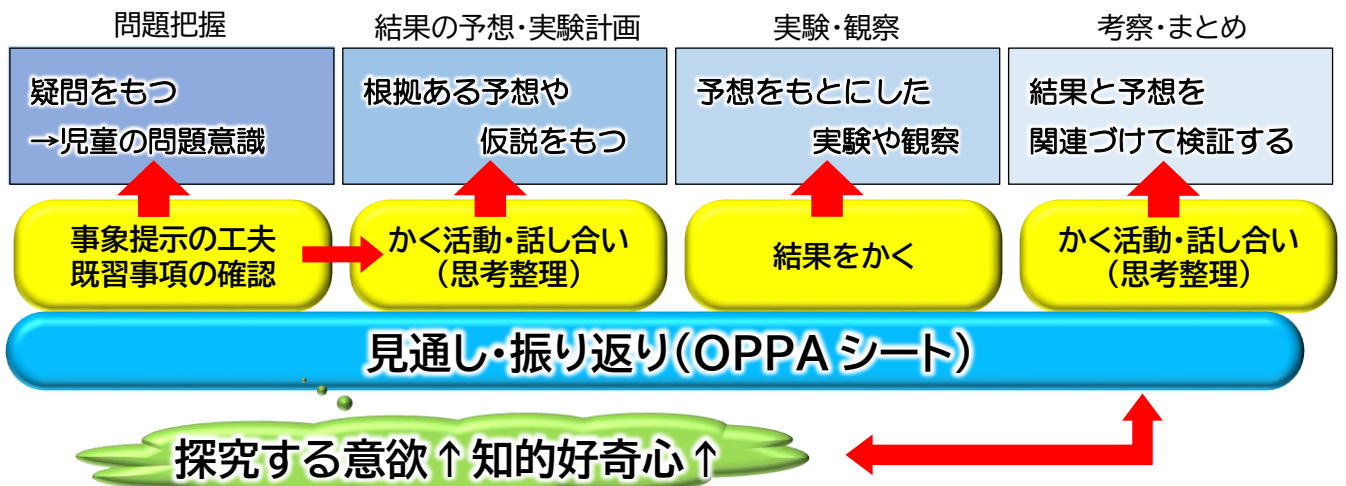


見通し・振り返り(OPPAシート)

探究する意欲↑知的好奇心↑

この流れを繰り返すことにより、次第に既習や経験をもとに願いを明確にもって学習していくことができる。

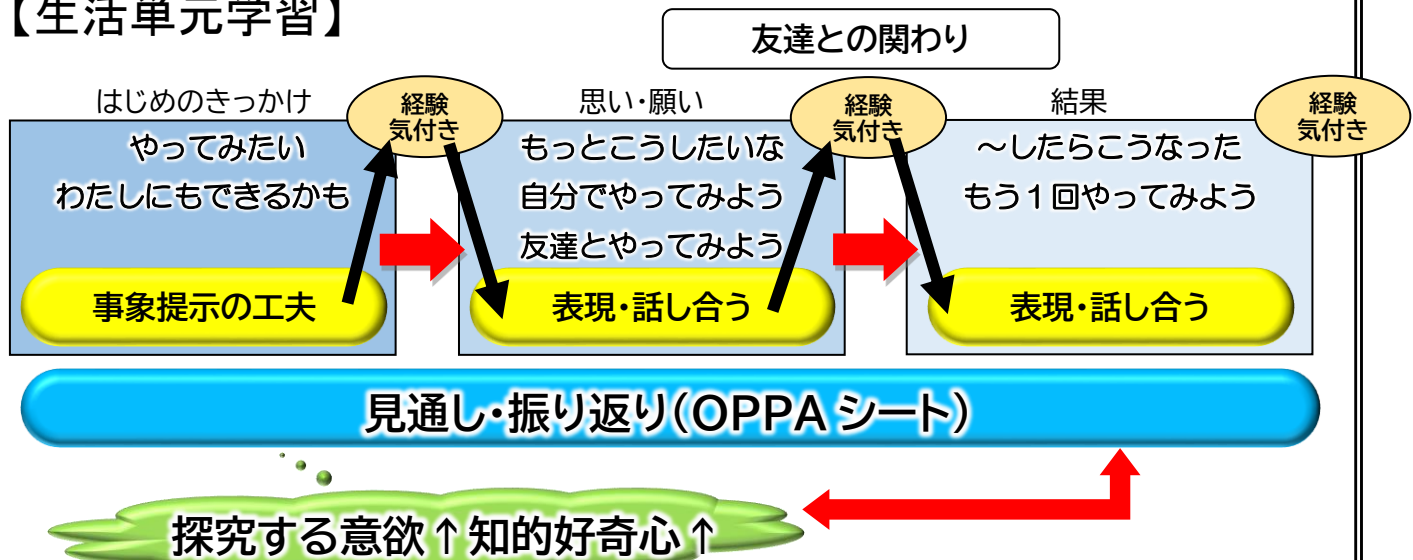
【理 科】



※常にこの過程通りに学習が成立するわけではなく、時には、『考察→再実験計画→実験』等、順序が異なる場合も考えられる。

※最終的には、この場面が基盤となり、自ら問題を解決する方法(実験や観察)を検討する力が向上し、問題解決の一連の流れを習得できると考える。

【生活単元学習】



この流れを繰り返すことにより、次第に既習や経験をもとに願いを明確にもって学習していくことができる。

3 重点目標「振り返り」の評価基準

令和5年度の重点目標である「振り返り」には、下表2のような段階がある。

(表2) 【振り返り段階表】

振り返りレベル		意味	例
低	再生 想起	経験や知識を再生する。	～しました。～が楽しかったです。 ～が分かりました。
中	分析 整理	経験や知識をつなげる。 見方・考え方を働かせる。	～は、～ということが分かりました。 ～と、～の共通点が分かりました。
高	創造	経験から新たな知を生み出す。 見方・考え方を広げる。	結果より、～と考えたので、 次の時間は、～をやりたいです。

(「振り返り指導」小林和雄・梶浦真共書 教育報道出版社(2021))

表2を参考に、本校の児童の実態および発達段階を考慮して児童が自ら学習状況を把握し、自己変容できたか評価するために、表3「振り返り評価基準表」を作成した。

(表3) 【振り返り評価基準表】

評価基準	A 自ら学習状況を把握し自己変容できている	B 学習状況を把握している	C 学習状況を把握できていない
理 科	・～と、～の共通点(差異点)が分かりました。 ・結果より、～と考えたので、次の時間は、～をやりたいです。 ・～を確かめたいです。	・～が分かりました。 ・～が楽しかったです。	・記入なし。
生活科 生活単元学習	・もっと～できるようにしたいです。 ・～をくふうしたいです。	・～しました。 ・～が楽しかったです。	・記入なし。

表3を参考に、各学年の発達段階に応じた評価基準を作成し、OPPA シートに書かれた児童の記述が、単元を通してどのように変化していったのか経過分析をしていく。

4 生活科・理科・生活単元学習における「目指す児童像」

研究主題の設定で述べたように、生活科・理科・生活単元学習を軸に研究を推進している。

しかしながら、各教科に取り組む児童の実態や発達段階や教科特性が異なることから、校内研究の目指すべき重点目標、研究仮説は統一しながら、児童の発達段階や実態に応じた「目指す児童像」を設定し、研究を推進していくことにした。

令和5年度の「目指す児童像」は以下の通りである。

低学年

自然や身の周りの事物・現象に対して、「見つける」「比べる」「たとえる」ことについて振り返りができる子

中学年

自然の事物・現象に対して、共通点や差異点、関係性について振り返りができる子

高学年

自然の事物・現象に対して、多面的に考え、妥当な考えについて振り返りができる子

なかよし

身の回りのことや活動したことについて、自分なりの考えや思いを振り返ることができる子

本年度の重点目標である「振り返り」のA・B・C基準と「目指す児童像」を組み合わせ、児童の実態や発達段階に応じた評価、変容の把握および分析を行っていく。

5 研究仮説に対する具体的な手立てについて

《理科・生活科・生活単元学習に共通した手立て》

(1) 毎時間、授業の振り返りを発達段階に応じたOPPAシートで行う。(学習状況の把握)

- ・児童自身が学習状況を把握するために、単元中の振り返り(学習履歴)できるように毎時間記録していく。
- ・振り返りの際に各学年の指導事項の「考え方」となるような言葉を意識できるようにする。

(例)3年「比較」、4年「関連づけ」、5年「条件制御」、6年「多面的」

(2) 単元の始めと終わりの自己の「考え方」の変容をOPPAシートを通して気付かせる。

【自己変容・概念獲得】

- ・自然の事物・現象、課題に対して、単元学習前、単元学習後に自分の考えを書かせることで、自己の変容に気付くことができるようにする。

(3) ICT(1人1台端末)の活用をする。

- ・意見の共有、思考の可視化、実験結果の共有をするには、ICTが極めて有効である。また、個別最適な学びと協働的な学びの面でも、ICTを積極的に活用していきたい。

(例)①スプレッドシート(意見の共有、実験結果の共有)

②Jamboard(分類整理、思考の可視化)

③Padlet(意見の共有、分類整理)

《生活科》

(1) やってみたいという気持ちを引き出せるような教材や事象提示の工夫

- ・導入の工夫
- ・目的意識がもてるような素材の準備(自分の願いをもって取り組めるように)
- ・諸感覚(見る・きく・触れる・かぐ・感じる・なぜ?など)を意識して活動できるような支援

(2) 伝えたいという気持ちを引き出せるような表現活動の工夫

- ・実物を見ながら考えをまとめる場の設定
- ・友達の考えと比較する話し合いができるような場の設定
- ・見つけたことや気付いたことをかきたくなるようなワークシートの工夫

(3) 友達とのかかわりを通して、自分の成長や友達の成長に気付かせる手立ての工夫

- ・友達と一緒に試したり、遊んだりすることができる場の設定
- ・思いや願いを共有し、互いに学び合える関係づくりの支援
- ・単元の振り返りの中で、互いに気持ちを伝え合う場の設定

(4) その他(上記の①②③にあてはまらない研究仮説に対する具体的な手立て)

- ・振り返りを生かすための単元構成づくりなど
- ・自ら探究していくことができるような意図的な活動の場の工夫など

《理科》

(1) 自分の問題としてとらえ、解決したい意欲や、試してみたいという気持ちを引き出せるような教材や事象提示の工夫

- ・導入の工夫
- ・既習や生活経験と異なったり、予想と事実が違ったりする現象が見つけれられる場の設定
- ・「自分もしてみたい」「確かめてみたい」と感じる事象の提示
- ・目的意識がもてるような素材の準備(はっきりとイメージできる材料)
- ・諸感覚(見る・聞く・触れる・かぐ・感じる・なぜ?など)を意識して活動できるような支援

(2) 疑問から問題へと焦点化していくための思考整理場面の設定

- ・自分の考えを整理、まとめる場の設定(かく・話し合うなどの表現活動)
- ・友達とのかかわりの中で、自分の考えをもったり、友達の考えを比較したりして、納得できる考えを導き出す場の設定
- ・次へつながるように授業後の感想をかく場の設定
(確かになったことの振り返り、残っている疑問など)

(3) 日常生活と関係づけて考える場の設定

- ・実験などで明らかになったことが日常生活にどのように生かされるのか興味をもたせる場の設定
- ・日常生活に生かされていることを活用して学びを深める場の設定
- ・単元の振り返りの場の設定

(4) その他(上記の①②③にあてはまらない研究仮説に対する具体的な手立て)

- ・振り返りを生かすための単元構成づくりなど
- ・自ら探究していくことができるような意図的な活動の場の工夫など

《生活単元学習》

(1) やってみたいという気持ちを引き出せるような教材や事象提示の工夫

- ・導入の工夫
- ・目的意識がもてるような素材の準備(自分の願いをもって取り組めるように)
- ・諸感覚(見る・きく・触れる・かぐ・感じる・なぜ?など)を意識して活動できるような支援

(2) 伝えたいという気持ちを引き出せるような表現活動の工夫

- ・感じたこと、気付いたことを伝えるための一人一人の実態に合わせた手立ての工夫
- ・友達の考えや思いを理解し共有するための手立ての工夫
- ・見つけたことや気付いたことを整理するためのワークシートの工夫やICTの活用

(3) 友達とのかかわりを通して、自分の成長や友達の成長に気付かせる手立ての工夫

- ・友達と一緒に試したり、遊んだりすることができる場の設定
- ・思いや願いを共有し、互いに学び合える関係づくりの支援
- ・単元の振り返りの中で、互いに気持ちを伝え合う場の設定

(4) その他(上記の①②③にあてはまらない研究仮説に対する具体的な手立て)

- ・振り返りを生かすための単元構成づくりなど
- ・自ら探究していくことができるような意図的な活動の場の工夫など

6 研究の検証方法

(1) 毎授業の個人内評価

OPPA シートに記載された振り返りの内容を、(表3)【振り返り評価基準表】と照らし合わせてA・B・C基準の児童数を把握する。

① 毎時間の学習状況の把握

OPPA シートから、児童が1単位時間の中で振り返りをして、自ら学習状況を把握できたのか、A基準・B基準・C基準で評価を行う。一方教師側は、資料提示の仕方や発問、教材・教具の工夫等、指導方法の自己評価および指導方法の改善を図る。

② 毎時間のA基準・B基準・C基準の児童数の経過分析及び形成的評価

OPPA シートから、1単位時間の中で児童の振り返りに対するA基準・B基準・C基準に到達した児童数を求め、毎時間・基準ごとの数値変化を把握し、児童の自ら探究する意欲が高まっているのか形成的評価を行う。

③ 単元の始めと終わりの自己変容

OPPAシートから、児童の単元の始めと終わりで自己変容に対するA基準・B基準・C基準の総括的評価を行う。単元全体を通して、自分の学び方がよりよく変容していくことで、児童の自ら探究する意欲が高まっているのか検証する。

※分析シート(Excel ファイル)に数値を入力し、グラフ化(可視化)することで、振り返り(OPPAシート)が、仮説に対して効果的な指導法であったかを検証する。

④ICTの活用(Excel・Forms)

Forms のアンケート機能を使って単元の中の手立てや振り返り(OPPA シート)が、自己の学習状況の把握や、探究する意欲の向上に効果があったのか、反対に効果がなかったのかを分析する。そうすることにより、紀要にまとめる際の評価(反省)材料となる。

(2) 児童の発言やワークシート・ノート・OPPA シートによる分析

学習中の発言やワークシートまたはノートの記述内容、OPPA シートの記述内容から、願いをもつ(生活科・生活単元学習)学習状況の把握、自己変容(理科)について具体的な姿を記録し検証する。

- ・気付いたことを、諸感覚を使って表現できているか。
- ・「〇〇」が分かった。分からなかった。(どこまで理解できているか)
- ・始め「〇〇」だったけど、終わりでは、「〇〇」なことが分かった。(変化への気付き)
- ・「〇〇したい」という目的意識をもって活動できているか。
- ・既習や体験をもとに自分の予想(考え)をたてることができているか。
- ・考察場面で、予想と関係づけて考えることができているか。

(3) OPPIA シートの活用方法

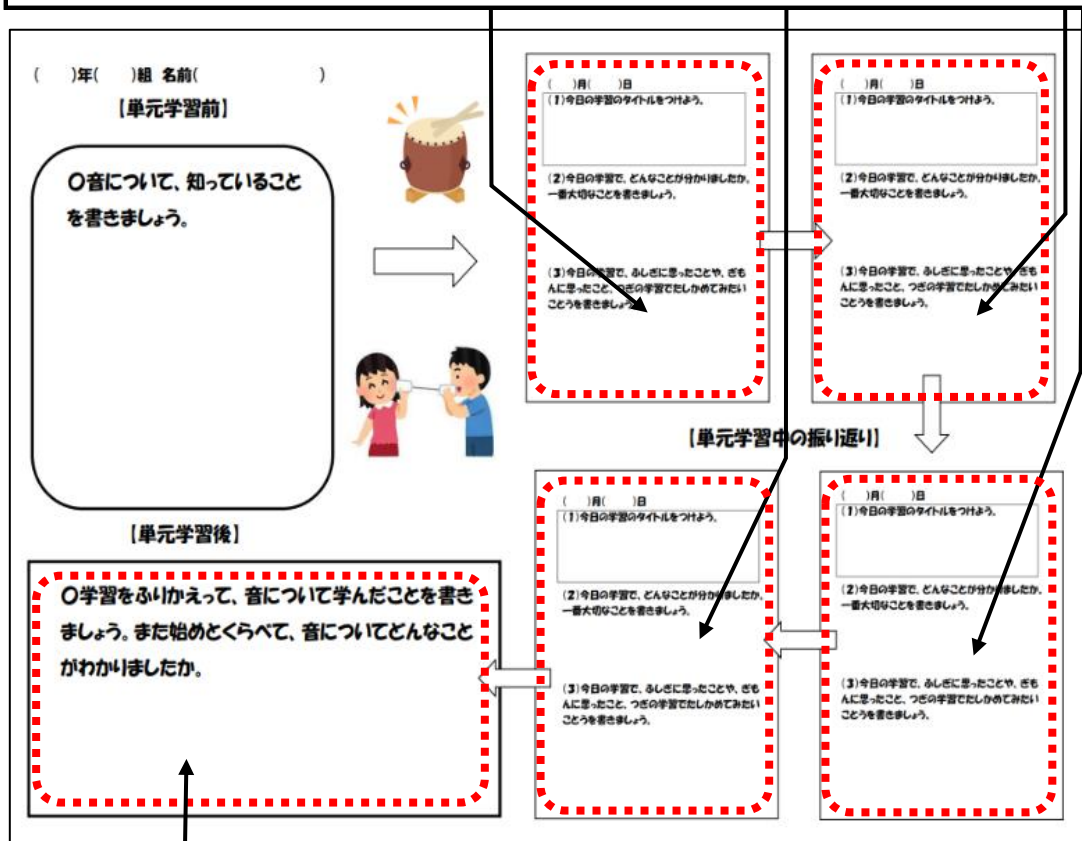
学習状況の把握に関する「振り返り」

①毎時間の学習履歴

この授業で「最も大切なこと」または、タイトルをつける。

②探究に関する項目

不思議、疑問に思ったこと、次の時間に調べたい、確かめたいことを書く。



自己変容・概念獲得に関する「振り返り」

①本質的な問い(学習前・後)

7 研究の検証内容

【令和5年度 Forms によるアンケート内容(案)】

- ① 予想を考えると、前の学習を思い出して根拠をもって考えましたか。(振り返り)
- ② 何が不思議なのかよく考えて問題を作りましたか。(課題発見力)
- ③ 分かるためにどのような実験をするとよいか考えられましたか。(問題解決力)
- ④ 次にどのような実験をするとよいか考えられましたか。(見通し)
- ⑤ 実験から、分かったことをノートに書くことができましたか。(考察力)
- ⑥ 疑問や、不思議に思ったことはありましたか。(知的好奇心)
- ⑦ 学習内容にやってみたい、知りたい、調べてみたい、確かめたいことはありましたか。
(探究心)

《4段階評価》

1: たいへんあてはまる。2: どちらかというにあてはまる。

3: どちらかというにあてはまらない。4: あてはまらない。

★単元の始めと終わりで肯定的な評価がどのように変化したのか検証する。

(令和5年度初回アンケート内容案)

1: 理科(生活科)の授業は、楽しいですか。

2: 理科(生活科)の授業で、やってみたい、知りたい、調べたい、確かめたいという意欲をもっていますか。

★アンケートの結果から、年度の始めと終わりを比較し、理科・生活科・生活単元学習の授業における「児童が自ら探究する意欲」が向上したかを調べる。

★年度の始めと終わりで肯定的な評価がどのように変化したのか検証する。

8 今年度の研究計画および日程

(1) 研究計画(案)

【1学期】

- ・提案授業(生活科・理科)を行う。
- ・全体講師の指導を受ける。
- ・各学年の発達段階に応じた振り返り指導(OPPAシート)を考える。
- ・実籾小の3校合同研究協議会に参加する。
- ・東習志野小学校の公開単元を前期単元の授業研で行う。(前期2名)

【夏休み】

- ・前期の振り返りの仕方が有効であったか、検証をする。
その結果を踏まえて、修正、改善し、後期の単元の振り返り指導(OPPAシート)を考える。
- ・後期の単元を決め、教材研究と指導案検討を行う。

【2学期】

- ・後期授業研を行う。(後期2名)
- ・東習志野小学校の公開研究会に事務局として参加する。
- ・後期の振り返りの仕方が有効であったか、検証をする。
その結果を踏まえて、後期単元の成果と課題をまとめる。

【3学期】

- ・後期研究紀要を作成する。
- ・今年度の重点目標であった「振り返り」(OPPAシート)について、成果と課題を共有し合い、次年度の研究について確認する。

(2) 研究年間日程表(予定)・研究日:原則毎週木曜日(15:15~16:30)

日にち	種類	内 容
R5/4/10(月)	推進	第1回研究推進 今年度の研究について、講師の決定 重点目標「振り返り」について、方向性を共通確認する。
	学年	学年で検討した事項の確認・報告 アンケート内容相談 前期指導者の単元、内容の相談
4/11(火)~	学年・推進	第2回研究全体会に向けて、生活科小坂井 T、理科山口 授業準備。指導案作成
4/27(木)	全体	第1回 研究全体会 今年度の研究について(講師なし)15:15~
5/2(火)	推進	第2回研究推進 研究全体会について 単元指導者・授業日の決定 (前期2名・後期2名) 授業研究に向けて (指導案検討、指導案の雛形、注意事項)

5/18(木)	全体	第2回 研究全体会 提案授業(生活科小坂井 T・理科山口)研究体会
5/19(金)	全体	★第1回実態調査
5/22(月)～ 5/26(金)	学年・部会	アンケート集計、前期授業研について話し合い等。 ★早い学年だと指導案検討開始
5/29(月)～ 5/31(水)	学年	★早い学年だと指導案検討開始
6/1(木)	推進・部会	第1回実態調査提出
6/6(火)	推進	第3回研究推進 前期研究の単元・指導者の確認 協議会のやり方の確認
6/8(木)～	学年	指導案作成、教材研究、指導案検討等
	学年	前期授業研究(学年の日程に合わせて行う 2名)
	学年・部会	前期授業研究の振り返り・反省
	推進	三校合同研究協議会当日の流れの確認(実籾小)
6/26(月)	全体	三校合同研究協議会参加(実籾小)(PM)
7/4(火)	推進	第4回研究推進 前期授業研究の中間の振り返り・反省 2学期以降の後期授業研究について
	学年	前期授業研究(学年の日程に合わせて行う 2名)
夏休み	学年	後期研究の教材研究・指導案検討(学年)
9/5(火)	推進	第5回研究推進 2学期の単元指導者・授業日の決定(後期 2名)
9/9(月)	学年・部会	後期授業研の準備、指導案検討
10/3(火)	推進	第6回研究推進 東習志野小学校公開研究会当日の流れについて
	学年	後期授業研究(学年の日程に合わせて行う 2名)
11/7(火)	推進	第7回研究推進 東習志野小学校公開研究会当日の流れの確認について
11/16(木)	全体	★東習志野小公開研究会参加。 *協議会の司会、進行をするのか。

	学年	後期授業研究(学年の日程に合わせて行う 2名)
12/5(火)	推進	第8回研究推進 後期研究紀要の書き方について 第2回実態調査について
12/12(木)	全体	第2回実態調査
	学年	後期授業研究(学年の日程に合わせて行う 2名)
12/16(月)～ 12/19(木)	学年・部会	アンケート集計
12/20(金)	推進	第2回実態調査提出。
	学年・部会	研究紀要の原稿作成
冬休み	学年・部会	研究紀要の原稿作成
R6/1(月)	学年・部会	研究紀要の原稿作成
1/16(火)	推進	第9回研究推進 後期研究紀要の進捗状況について
2/8(木)	学年・部会	★研究紀要の提出
2/13(火)	推進	第10回研究推進 本年度の研究の成果と課題についての話し合い 本年度の研修のまとめ 次年度の研究について
2/19～2/23(金)	学年・部会	★研究紀要修正期間
2/27(火)	学年・部会	★研究紀要修正後提出
2/29(木)	全体	第3回研究全体会
3/7(木)	全体	★研究紀要印刷完成
3/12(火)	推進	第11回研究推進 本年度の研究のまとめ 次年度の研究について

9 講師の先生について

全体講師:若崎 光美先生		○講師の先生は、4回来ていただける予定です。 指導案検討日・研究授業日を予め話し合っておいてください。
井上 聡子 先生	1年	
大木 俊宏 先生	2年	
荒井 英治 先生	3年	
豊岡 修 先生	4年	
春名 拓也 先生	5年	
高橋 優樹 先生	6年	
荻野 智美 先生	なかよし	

【1学期の授業研究に向けて行うこと】

①各学年の講師の先生に連絡を取る。

(あいさつ・指導案検討日・授業日は、月 日()・展開予定の単元について)

②指導案の作成。

③三役の先生に起案をする。ご指導を受け、修正する。

④講師の先生に送付(指導案検討日2週間前までを目安にする。)

⑤三役、研究主任に一部ずつ提出する。

⑥指導案の検討をする。

各学年の講師の先生から、ご指導を受ける。

考えている授業に必要なものを用意する。

必要なものがあれば、理科主任、研究主任に連絡をする。

⑦指導案の修正 講師の先生に送付。(授業日1週間前までを目安にする。)

⑧修正後の指導案を一部ずつ、職員に配付する。(レターボックス)

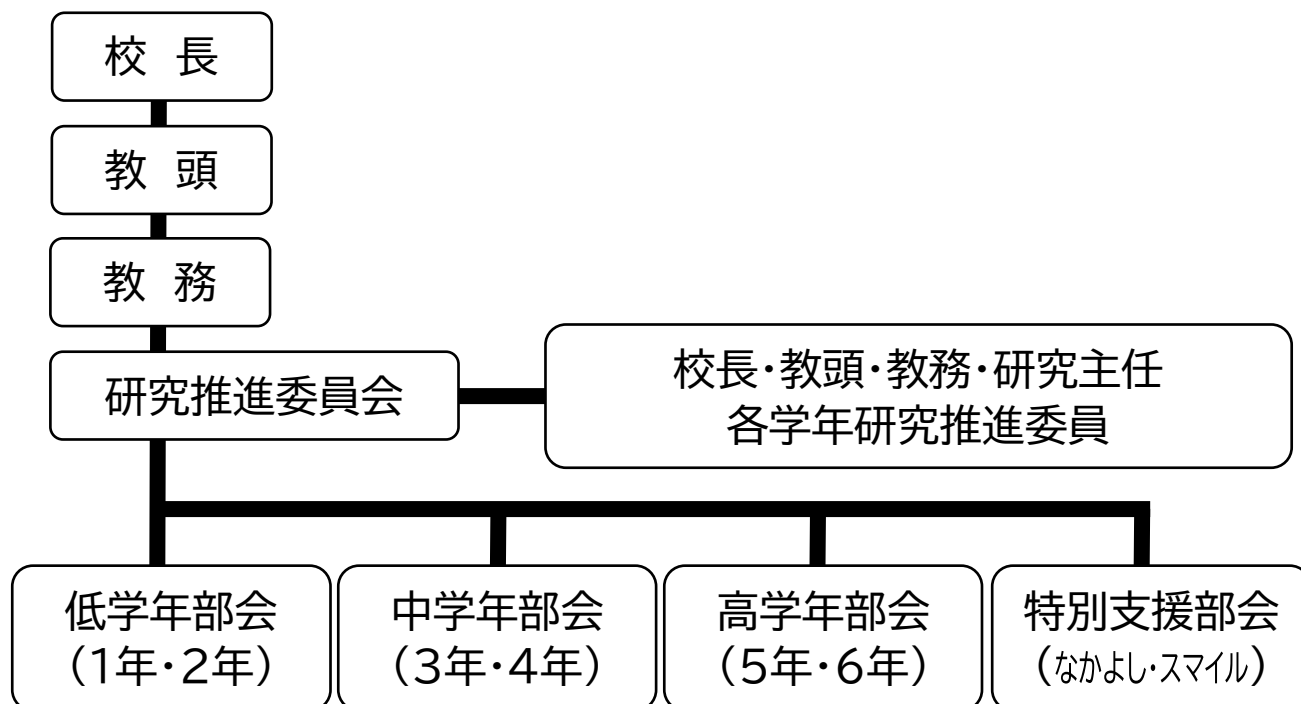
⑨授業・協議会 ご指導していただいたことを後期の授業研究に生かす。

研究主任に報告。できれば、この日に夏休みの指導案検討の候補日を伝えておく。

10 中長期的研究計画および3校合同研究計画

小学校	令和5年度	令和6年度	令和7年度
鷺 沼	研究協力	三校協同研究会	公開研究会(まとめ)
実 籾	三校協同研究会	公開研究会	研究協力
東習志野	公開研究会	研究協力	三校協同研究会

11 研究組織



13. 引用及び参考文献

- (1) 中央教育審議会:「令和の日本型教育の構築を目指して～全ての児童の可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学び(答申)～」, 2022.
- (2) 文部科学省:「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 理科編」, 2017.
- (3) 文部科学省:「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 理科編」, 2017.
- (4) 吉金佳能:「小学校理科 探究的な学びのつくり方」, 明治図書, 2023.
- (5) 小林和雄・梶浦真:「すべての児童に深い学びに導く「振り返り指導」」, 教育報道出版, 2023.
- (6) 仲井勝巳:「小学校理科における児童の概念獲得に関する研究動向—振り返り指導に方略に着目して—」, 聖学院大学論叢 第34巻, 2022.
- (7) 仲井勝巳:「小学校理科における指導者の振り返りの意義—授業時の振り返りの重要性に着目して—」, 聖学院大学論叢 第35巻, 2022.
- (8) 長竹裕美:「小学校理科において自然事象を科学的に説明し理解を深める児童の育成～見通しと振り返りを充実させて～」, 群馬大学大学院教育学研究科専門職学位課程(教職大学院)課題研究報告会資料集, 2021.
- (9) 山下春美・堀哲夫:「OPPA シートを活用した授業のグランドデザインに関する研究:小学校6年「ものの燃え方と空気」の単元を事例にして」, 教育実践学研究 15, 2018.
- (10) 畦浩二:「一枚ポートフォリオ評価(OPPA)の活用とその教育効果—小学校5学年の「ヒトのたんじょう」の事例を通して—」, 大阪教育大学紀, 2015-09-30.
- (11) 橋本健夫・楠本正信:「一枚ポートフォリオを活用した理科学習(Ⅰ)」, 2006.
- (12) 大前暁政:「小学校理科の探究的な学習が育てる資質・能力と指導方略及び評価方法に関する研究」, 京都文教大学 こども教育学部研究紀, 2022.
- (13) 中央教育審議会:「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」, 2016.
- (14) 原田雅史:「理科学習における探究的学習活動の効果的な展開を目指して」, 滋賀大学研究紀要 59, 2017.
- (15) 文部科学省:「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活科編」, 2017.
- (16) 堀哲夫:新訂一枚ポートフォリオ評価OPPA 一枚の用紙の可能性, 東洋館出版, 2019.